

第22回コブレンツ 国際ギターフェスティバル&アカデミー

レポート・写真：テレーズ・ワシリー・サバ Thérèse Wassily Saba ／ 翻訳：関塚亮司 Ryoji Sekizuka

ドイツ・ライン河流域の風光明媚な観光都市コブレンツで毎年開催される「コブレンツ国際ギターフェスティバル&アカデミー」。今年で、第22回を迎えたこのフェスティバルの模様を、「ロンドン便り」の連載でお馴染み、コンクールの審査員も務めたワシリー・サバさんのレポートにより紹介する。



コブレンツ国際ギターフェスティバル&アカデミーを取材して感じるのは、フェスティバルが年々良くなっていることだ。これまで12年間参加してきた私が毎年抱く、期待感を容易に想像して頂けると思う。幸いなことに、今年も私の期待は裏切られなかった。

今年で第22回を迎える「コブレンツ国際ギターフェスティバル&アカデミー」は、ドイツのコブレンツで、6月1日～9日まで開催された。今回の特徴は、招聘された多くの一流アーティストが例年になく長らく当地に留まることである。つまり、世界のトップレベルの演奏家達が、コンサートで素晴らしい演奏を披露しただけ

でなく、我々と夕食を共にし、有意義な会話を交わすに足る充分な時間が取れた訳である。

◆ライフ・アチーブメント賞授与式

彼らがフェスティバルに長く留まった理由の一つは、コブレンツ国際アカデミーのライフ・アチーブメント賞の授与式が、今年行なわれたからである。受賞したのはダダリオ社の副社長ジョン・ダダリオ Jr. とサバレス社の社長ベルナール・マイヨである。両社とも創業したのは先代であるが、ダダリオ社の場合は一世代早く既に3代目に引き継がれている。両社とも、将来次の世代に継



ジョン・ダダリオ Jr. (左) とベルナール・マイヨ
©Thérèse Wassily Saba



(左より) 北京ギターデュオ：スー・メン (蘇萌) & ワン・ヤンメン (王雅夢)、マヌエル・バルエコ
©Thérèse Wassily Saba



アルバロ・ピエッリ
©Thérèse Wassily Saba

承するための準備が進められている。両社の強力な製品改善努力により、我々は質の高い音色を手に入れることができた。

授与式は、2014年6月9日（月曜日）に選帝候宮殿で行なわれた。ジョン・ダダリオ Jr. とベルナール・マイヨが会場に入ってくると、若いギタリストたちが式典における儀仗兵のようにギターを高く捧げた。開会の音楽がコブレンツ市音楽学校のプラス・カルテットによって演奏された後は、祝辞が続いた。スピーチをしたのは、コブレンツ市音楽学校のドロテア・バッハヴァルト、コブレンツ国際ギター協会会长のリヒャルト・コッホ＝センブナー博士、コブレンツ国際ギター・アカデミーのギュンター・フォルステライヒナー、そして、コブレンツ応用科学大学のウリ・ニエラシュッケル博士によって、受賞者を称賛するスピーチが行なわれた。

授与式では、アルバロ・ピエッリが3曲演奏した。我々の興味は、彼がダダリオ製とサバレス製のどちらの弦を使用したのかということであった。ピエッリは、シダートップのギターとスプルーストップのギターについて、

ギタリストがどのような議論をしているのかを話し、ダダリオ弦とサバレス弦を使う理由についても語った。

彼は、舞台に2台のギターを持ってきて、それぞれにダダリオ弦とサバレス弦をミックスして使っていると説明した。それは、この状況下では外交的にベストな解決策であったと思う。ジョン・ダダリオ Jr. とベルナール・マイヨは共に納得していた。

コブレンツ国際アカデミーが、ライフ・アチーブメント賞を授与したのは今年で3回目になる。2009年にはロメロ・ファミリーを代表してペペとセリン・ロメロに与えられ、2010年にはコンラート・ラゴスニックに与えられた。

◆ゲスト・アーティストによるイブニング・コンサート

フェスティバルの初日、マルシン・ディラが素晴らしいオープニング・イブニング・コンサートを行なった。ポンセ〈スペインのフォリアの主題による変奏とフーガ〉、ディアベッリ、シューベルト、マグヌス・リンドベルリの作品に加えて、ラトビアの作曲家ペトリス・ヴァスクス(1946-)の〈孤独のソナタ〉など素晴らしい演奏を聴かせた。コブレンツ・フェスティバルにおけるコンサートの音楽的センスは、確かにレベルが高い。参加した学生達は、コンサートが終了した数日後も、マルシン・ディラの演奏の素晴らしさについて話し合っていたことからも明らかだ。

言うまでもなく、この高いレベルは翌日のパヴェル・シュタイドルの演奏に引き継がれた。彼は、メルツやコストの作品の間にレオシュ・ヤナーチェクやヤナ・オプロフスカの作品を交互に演奏して、我々の音楽的想像力を刺激した。

マヌエル・バルエコは、コブレンツ・ギター・フェスティバルと、1872年に創立された歴史ある音楽ソサイエティであるコブレンツ室内楽グループとの共催コンサー

トで、北京ギターデュオと共に演じた。演奏曲目はバッハ作品と、彼自身がギタートリオ用に編曲したピアソラの作品、中国の作曲家チェン・イー（陳怡）が作曲した〈China West Suite〉であった。

また、バルエコの独奏によるトゥリーナ（ソナタOp.61）は忘れられない名演奏だった。

イブニング・コンサートは続き、デイヴィッド・ラッセルは、ソル、バッハ、彼自身がコブレンツ・フェスティバルの聴衆ために編曲したヴィヴァルディの〈ソナタ・変ロ長調〉を演奏したが、非常に好評であった。これに加えて、彼に献呈された作品2曲、ホアン・サローチャの〈Jubilosa Plenitud〉と、ホルヘ・モレルの〈ソナチネ〉を演奏した。

ペペ・ロメロが作り出した素晴らしい音色が、彼のソロ・イブニング・コンサートの会場全体に響きわたった。演奏した曲目は、ミラン、ムダーラ、ジュリアーニ、彼の父セレドニオ・ロメロ、ロドリゴ、ファリヤ、M=トローバ、トゥリーナ、タレガの作品だった。

1週間にわたって、このようなトップレベルのギタリストの演奏を連日聞くことが出来たのは、まるで夢のよ



ペペ・ロメロ

©Thérèse Wassily Saba



(左より) ルチオ・マタラツォ、コスタス・コチョリス、パヴェル・シュタイドル、トマス・オッファーマン
©Thérèse Wassily Saba

うな素晴らしい体験であり、美しい演奏を聴いた喜びを聴衆全員が味わうことが出来た。

◆ 5pm. リサイタル・シリーズ

今年は、レベルの高いイブニング・コンサートに加えて、毎日午後5時から開始されるリサイタル・シリーズも行なわれ、とてもワクワクさせられた。

会場となったライン・モーゼル・ホールの小さなコンサートルームは、天井から床まで全面ガラス貼りの窓を持ち、そこからライン河と美しい緑の木々に覆われた岸辺を見渡すことが出来る。いずれスターとして活躍するであろう若手演奏家たちの豊かな音楽的アイディアと、楽器を通して自分を十二分に表現出来る彼らの優れたテクニックを聴くことが出来た。ギターの将来について懸念を持つ人は、コブレンツ・フェスティバルの「5pm. リサイタル・シリーズ」に足を運ぶべきである。

ブルガリア出身のギタリスト、デイヴィッド・ディヤコフが“フーパート・ケッペル”コブレンツ国際ギターコンクールで優勝したのは2011年のこと。賞品の中には、彼のCDの製作が含まれていた。KSG エックスオーディオ社が作成した彼のCDのタイトルは『Il Diabolico』で、バッハ《無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番BWV1004》とパガニーニ《24のカプリス》から5曲を録音している。パガニーニは“悪魔的”と称された超絶技法で知られているが、デイヴィッド・ディヤコフがリラックスして演奏しているのを見ていると、彼はパガニーニの音楽に対して絆を持っているだけではなく、パガニーニの精神との絆もあるように感じられた。今回のコブレンツでのコンサートでは、アントニオ・ホセ〈ソナタ〉、パガニーニの《24のカプリス》から3曲、6月末のGFA国際ギターコンクールで演奏することになっているカーティス・スミス作曲の〈エボカシオン〉を演奏した。

次に「5pm. リサイタル・シリーズ」に登場したのは、



(左より) ペペ・ロメロ、デイヴィッド・ラッセル、マヌエル・バルエコ
©Thérèse Wassily Saba

セルビア出身のギタリスト、サブリナ・ウラスカリックで、音楽的アイディアに満ちた、優れたテクニックで演奏した。彼女が演奏した曲目はすべて珍しい作品であった。デュージャン・ボグダノヴィチによる《6つのバルカンの細密画》はこれまで聴いたことがない作品で、この作品が持っている民族音楽的なインスピレーションが充分に引き出されていた。アルベルト・ヒナステラの〈ソナタ Op.47〉は、最近、若手ギタリストたちのコンサートプログラムで盛んに採り上げられる曲だが、この作品が持っている音楽的な内容を必ずしも充分に理解していない演奏も多い。しかし彼女は、ヒナステラの音楽についてすべてを理解しており見事な演奏を聴かせた。ボグダノヴィチとヒナステラ両者の作品は、ギターにパーカッシヴなものを求めている。ギタリストの中には、ギターを傷つけないように注意深く演奏する人がいるが、サブリナ・ウラスカリックはそうではなかった。音楽が

第一で、ギターは二の次といった、彼女の思い切った演奏からは、エキサイティングな要素が作り出されていた。とても情熱的な彼女の演奏は、デイヴィッド・ディヤコフ同様、聴いていて非常に楽しかった。

モンテネグロ出身のギタリスト、ゴラン・クリヴォカピチは素晴らしい演奏家だが、いつも演奏曲目を変更する。今回、バッハ《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番 BWV1003》の彼流の解釈を聴けたのは運が良かった。

アレキサンダー＝セルゲイ・ラミレスは、彼のレクチャー・リサイタルで、ボリビアのスフレ在住の歴史家、ウイリアム・ロフストロームによってペルーの作曲家ペドロ・ヒメネス・デ・アブリル・イ・ティラード（1780-1857）の作品が再発見されたと語った。再発見された曲集には、交響曲40曲、ミサ曲48曲、ピアノ伴奏付の歌曲226曲、ピアノのためのワルツと室内楽曲50曲が含まれていたという。その他、ペドロ・ヒメネスは、ギター



デイヴィッド・ディヤコフ ©Thérèse Wassily Saba



アニエロ・デジデリオとダヴィッド・ダンツマイヤー指揮ライン州立交響楽団 ©Thérèse Wassily Saba



サブリナ・ウラスカリック ©Thérèse Wassily Saba



ヴォルフガング・ディ (rec.) とフーバート・ケッペル ©Thérèse Wassily Saba

作品、チェロとギターのための作品、ギターとアンサンブルのための2つのディヴェルティメントなど、計119曲も作曲している。アレキサンダー＝セルゲイ・ラミレスは、こうした魅力的な作品の中から数曲を選んで演奏した。彼はこうした作品で『Guitarra Classica del Peru』というタイトルのCDを作成、また、『ギターソロのためのメヌエット100曲』を編集し、Edition Chanterelle im Allegra Musikverlag社から出版している。

昨年の“フーバート・ケッペル”コブレンツ国際ギターコンクールで優勝した台湾出身のチアウェイ・リンも「5pm. リサイタル・シリーズ」で演奏した。彼の新しいCDに録音されている中国の作品数曲に加えて、バッハの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第3番BWV1005》を演奏したがとても素晴らしかった。

◆フライデー・ナイト・コンサート

「ギターとオーケストラのためのフライデー・ナイト・コンサート」では、イタリアのギタリスト、アニエロ・デジデリオが、ライン・モーゼル・ホールで、ダヴィッド・ダンツマイヤー指揮ライン州立交響楽団と共に演じた。ホアキン・ロドリゴ〈ある貴紳のための幻想曲〉とレオ・ブローウエル〈ギター協奏曲第2番「リエージェ」〉を演奏した。2曲とも聴いていて非常にわくわくした。

◆その他のコンサート・催し

6月7日（土曜日）のコンサート・プログラムは、盛りだくさんだった。まずゲルハルト・ライヒエンバッハが、バッハ作品のギター編曲に関するレクチャー・コンサートを行ない、彼が編曲した鍵盤のためのパルティ

タ2曲《パルティータ第3番BWV827》と《パルティータ第1番BWV825》を演奏した。コブレンツ市中央にある古い教会の一つフローリンス教会では、ランチタイム・コンサートが行なわれ、ウォルフガング・ディのリコーダーとフーバート・ケッペルのギターによるデュオ演奏が行なわれた。

この日の「5pm. リサイタル・シリーズ」では、ゾーラン・ドウキッチがヴォイスラフ・イヴァノヴィチ作曲の〈ソナタ〉を演奏した。この作品は20年前に作曲されているが、シャントレル社によって出版されたのは、なんと昨年である。デューシャン・ボグダノヴィチの作品《6つのバルカンの細密画》の彼の解釈は素晴らしい、数日前にこの曲を演奏したサブリナ・ウラスカリックとは、全く違っていた。

6時30分には、ペルーのギタリスト、ホルヘ・カバジェロが、山下和仁編曲によるムソルグ斯基の《展覧会の絵》と、アルベニスの作品を数曲演奏した。非常に充実しこの日のエンディングは、ペペ・ロメロによる素晴らしいソロ・リサイタルであった。

フランク・ハウズチャイルド・トリオをフィーチャした「サンデイ・ナイト・ジャズ・コンサート」は、ライン河に沿った小高い山の上にそびえるエーレンブライシュタイン要塞の屋外ステージで開かれた。

もう一つ今年のフェスティバルで行なわれた重要なイベントは、ダダリオ社によるプロアルテの新製品と最新パッケージの発表が、ライン・モーゼル・ホールで6月6日（金曜日）に行なわれたことだ。ダダリオ社の副社長であるジョン・ダダリオJr. が出席して、学生やギタリストのためにカクテルなどの飲み物が用意され、新製



ギターの試奏をするジュディカエル・ベロワ



フランク・ハウズチャイルド・トリオ & ヴィタリイ・ゾロトフ ©Thérèse Wassily Saba



キュンター・シリングス指揮、コブレンツ・ジュニア・ギター・アカデミー・オーケストラの演奏

©Thérèse Wassily Saba

品のセット見本が無料で配られた。

フェスティバル期間中は、マスタークラスが時刻表に従って連続して行なわれた。公開マスタークラスを行なったのは、デイヴィド・ラッセル、マヌエル・バルエコ、アルバロ・ピエッリとマルシン・ディラである。

同時刻に実施されたマスタークラスの講師は、佐々木忠、コスタス・コチョリス、トーマス・オッファーマン、フーバート・ケッペル、北京ギターデュオである。

若手ギタリストのためのジュニア・ギター・アカデミーが、聖靈降臨祭の週末に開かれた。ギュンター・シリングス、ラッセル・ポイナー、マシュー・マーチン、アイヴァー・イバネスが指導し、バッハの〈主よ人の望みの喜びよ〉を取り上げた。

また、聖靈降臨祭を祝うカトリック・ミサが、イエズス広場と呼ばれる一角にある市立教会で開かれた。ソプラノ（キルステン・マックサイマー）、アルト（アルムート・ニエラシュッケル）、テノール（トーマス・カイザー）、バス（ウリ・ニエラシュッケル）による四声合唱と、ギュンター・シリングスが指揮するジュニア・ギター・アカデミーの生徒によるギター・アンサンブルとの共演で、バッハ〈主よ人の望みの喜びよ〉を演奏した。サブリナ・ウラスカリック、アレキサンダー＝セルゲイ・ラミレス、デイヴィッド・ラッセルがギターソロを演奏、また、ラッセル・ポイナーのギターとモニカ・ダウイデックのオーボエによるデュオ演奏も披露された。このミサに寄せられた献金は、デイヴィッド・ラッセル夫妻のNGOに贈られ、アフリカで飲料水の井戸建設に使われる。

◆コブレンツ国際ギターコンクール 2014

コブレンツ国際ギターコンクール“フーバート・ケッペル”2014の本選は、6月8日に選帝候宮殿で開催された。5名のファイナリストは、クロヴィス・デシエル（フランス）、ヴォジン・コチック（セルビア）、ジェレミー・ペレ（フランス）、キム・ジンサ（韓国）、エレン・ソープ（トルコ）。



(左より) ギュンター・フォルステライヒナー、ヴォジン・コチック（第2位）、エレン・ソープ（第2位）、キム・ジンサ（第3位）、ルチオ・マタラツォ、ジョン・ダダリオ Jr.、ベルナル・マイヨ

審査の結果、第1位：該当なし、第2位：エレン・ソープとヴォジン・コチック、第3位：キム・ジンサ、ホーキン・ロドリーゴ作品最優秀演奏賞は、ヴォジン・コチックに贈られた。コンクールの審査員は、ルチオ・マタラツォを委員長とし、フーバート・ケッペル、アルフレット・エックハルト、佐々木忠、ジュディカエル・ペロワ、ゲルハルト・ライヘンバッハ、トーマス・オッファーマン、マックス・デ・カンプ、テレーズ・ワシリー・サバが委員を務めた。

フェスティバルの最後のコンサートであるコンクール入賞者によるコンサートが6月9日に開かれ、いつもながら盛況だった。そして、ジュニア・ギター・アカデミー・オーケストラが4名の歌手と再び共演した。3名の入賞者、エレン・ソープ、ヴォジン・コチック、キム・ジンサの見事な演奏により、素晴らしい音楽に満ちた幸せな一週間が終わった。

◆ギター展示会

多数のギター製作家が集まる楽器の展示会が、ライン・モーゼル・ホールの明るくて風通しの良いロビーで開かれた。アントニウス・ミュラー、ゲルト・ペテルセン、カズオ・サトー、マリオ・グロップ、カナダのギター製作家ダリル・ペリー、マイケル・ウィックマン、ジェンズ・トウェット、フリードリッヒ・リンシェイド、シュテファン・シュレンパー、ギター・ケースの製作家ズラトウコ・パーロフが出演した。今回の特別出展者は、サバレス社のベルナル・マイヨとダダリオ社のトーマス・オッファーマン教授で、両社はコブレンツ・フェスティバルとコンクールを後援してくれている企業である。

フェスティバル・アカデミーのウェブサイト

www.koblenzguitarfestival.de

フェスティバルのブログ

<http://Koblenzguitarfestival.wordpress.com>

ツイッターアドレス

@koblenzguitfest